

あの「声」を目指して

私が看護学校の門をたたくこととなったのは、27歳になった春のことである。子育てをしながら6年間勤めた会社を辞め、看護の道へ進む決意をした背景には、約10年前に出会った、忘れられない「声」がある。

高校を卒業した私は、19歳になる年の冬に長女を出産した。妊娠・出産・育児のことなど何もわからず、周囲の目も気になり、産婦人科へ行く足さえ遠のこうとしていた。そんな中私は一人の看護師さんと出会ったのだ。そこは昔からあるこじんまりとした産婦人科医院で、その看護師さんはちょうど私の母親と同じぐらいの年齢の方だった。緊張しながら初めての検診に訪れた私にその人は「もうお母さんだね。若いのにエライなあ。」と温かい声で話しかけてくれたのである。それまで「そんな若さ大丈夫なの」という目で見られているではとビクビクしていた私にとって、その言葉は何より嬉しく、出産しても良いのだと認められたような気持ちになったことを今でも覚えている。その後定期検診の度に、その時々で必要なことを教えてくださり、私が暗い顔をしていると隣に座り「どうしたのよー？」と心底心配した声で話しかけてくれたのである。

そしてついに出産というとき、迎え入れてくださったのもその人だった。テキパキと処置をやってのけたかと思うと、元気いっぱいの声で「ようし、頑張ろうね。」と言い、私の手を握ってくれた。すぐ側にその声が聞こえたからこそ私は、痛みの中でもどこか大きな安心を感じながら出産にのぞむことができたのだと思う。産後も授乳がうまくいかずに落ち込んだり、身体の痛みで眠れなかつたりする私に対して、本当に頻りに声をかけてくださった。場面場面でいつも私を励まし、勇気づけ、時には灑々激励することで母親への階段を少しずつのぼらせてくれたのである。

あの時出産した長女も今もう10歳。出産した産婦人科医院はとても残念なことに今年で分娩の取扱いを終了することになったと聞いた。しかし私はあの時の声を今も忘れていない。温かい声、元気な声、優しい声、励ます声、その全てが私の支えとなった。看護学生となった今、コミュニケーションや声かけの難しさを強く実感している私にとって、あの「声」こそが看護の原点で、目指すところなのだ。各論実習の始まった先日、受持患者さんの退院が決まり玄関までお見送りをした所、迎えに来たご家族に「素敵な声ですね。良い看護師さんになってね。」と言って頂いた。思いかけない言葉に本当に驚いたが、少しずつあの声に近付けているのかなと嬉しい気持ちになった。これから看護師として、病気と闘う患者さんの側に寄り添い、支えとなれるような「声」の持ち主になりたいと改めて強く実感し、私は今日もまたベッドサイトへむかうのである。